『古代アメリカ』7, 2004, pp.33-49

<研究ノート>

ワシャクトゥンにおける歯牙変工の様相

—グループEとグループAを中心に[1]—

多々良　穣
(東北学院榴ケ岡高等学校)

【キーワード】
ワシャクトゥン、歯牙変工、埋葬形態、儀礼活動、神官
Uaxactun, dental mutilation, burial type, ritual activity, priest

1. はじめに

古代メソアメリカにおける歯牙変工は、切り込みを入れた「削歯」、宝石類などを歯に象嵌する「飾歯」、さらにはその両方の要素が混ざっているものが認められる。オアハカ (Oaxaca) やメキシコ高原では、先古典期前期からこの風習が見られるが、マヤ地域では先古典期中期以降しか歯牙変工は報告されておらず、型式も限られている。

この風習の説明として一般的に受け入れられているのは、通過儀礼である。肉体的あるいは精神的試練を体験させる儀礼が多く、歯を変工する際の激しい痛みに耐えるという意味から、特に成人式のような通過儀礼が歯牙変工の理由にあげられることが多い［Fastlicht 1960, 1962 ; Romero 1958, 1970］。しかし、この風習は一部の人々にしか認められず、一般的な通過儀礼とは考えにくい。従来歯牙変工は貴族の間で行われたとされてきたが［Miller and Taube 1993: 77］、貴族とは「上流階級」を指すもので、何となく漠然としている。

古代メソアメリカにおける歯牙変工の研究は、ロメロ (Javier Romero) を中心とした型式分類［Romero 1958, 1970］が代表的なものである。しかし、歯牙変工が一体何を意味するものなのか、どのような人々を対象にしていたのかを明らかにするような考古学的研究は十分ではない。以前筆者は、ワシャクトゥン、サン・ホセ (San Jose)、ベイキング・ポット (Baking Pot)、クエリョ (Cuello) のマヤ低地の4遺跡における歯牙変工の様相を整理したが［多々良 2004］、この小論では歯牙変工例の多いワシャクトゥン遺跡 (図1) のグループEとグループAを中心にさらに掘り下げて見ていく。ワシャクトゥンにおける歯牙変工と建造物の概要を整理し、建造物の推移を含めて歯牙変工と埋葬場所について時期ごとの傾向を明らかにし、歯牙変工されていた人物像を考察したい。

なお、小論で扱う資料の記述は論文や報告書に基づくもので［Olivares 1997, Ricketson and Ricketson 1937, Romero 1958, 1970, A. Smith 1937, R. Smith 1937, Smith 1950, Wauchope 1934］、筆者は資料を実見していない。

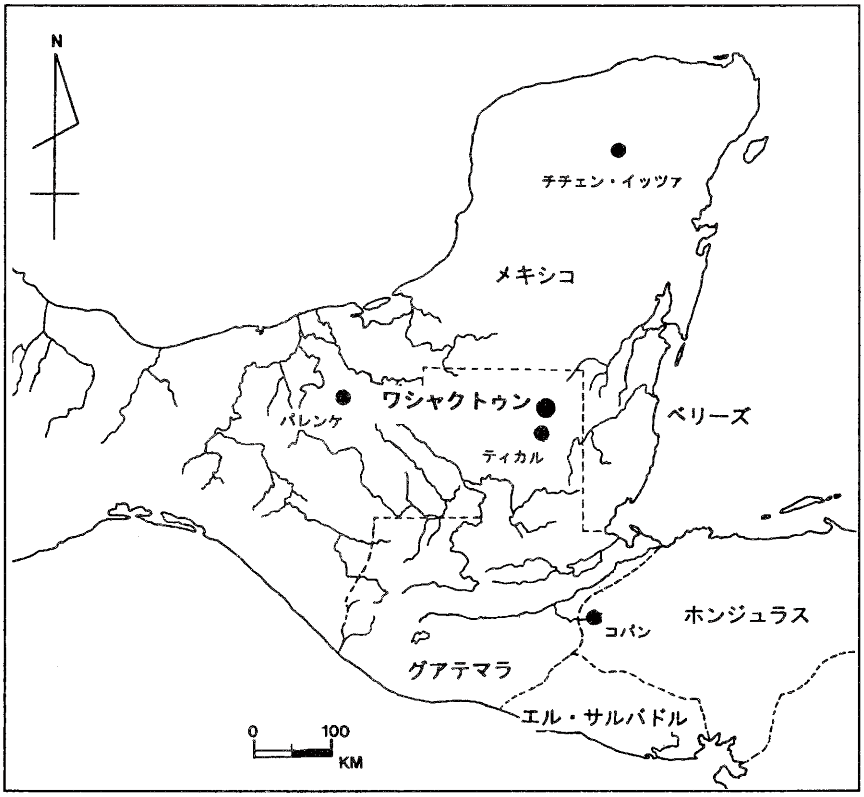

図 1　マヤ地域とワシャクトゥン遺跡

2. ワシャクトゥンにおける歯牙変工の型式

ロメロは歯牙変工を A 型から G 型までの 7 型式に分類し、さらに 59 種類に細分された歯牙変工を提示している [Romero 1970]。このロメロ分類は歯牙変工研究で広く使われており、小論でもこのロメロ分類を使用する。そのうちワシャクトゥンにおいて認められる歯牙変工の型式は、A-1・A-4・B-4・B-5・C-1・C-3・C-7・E-1・E-5・F-4・F-9・G-1・G-2 型の 6 型式 13 種類である（図 2・表 1）。以下、これらの型式について簡単に説明する。

A 型は歯冠の咬合面 [2)] のみを削ったもので、切り込みを一つ入れたものが A-1 型、先端部を平らに削ったものが A-4 型である。B 型は歯冠の一方の角を削った型式で、B-4 型は角を直角に削り取ったもの、B-5 型は鋭角に切り込みを入れたものである。C 型は歯冠の両角をそれぞれ削ったもので、先端部を残して両角を直線状に削り取ったものが C-1 型、やはり先端部を残して両角を直角に削り取って「T 字」形にしたものが C-3 型、両角を曲線状に削り取って先端部を尖らせたものが C-7 型である。E 型は歯冠の唇面に黄鉄鉱、翡翠（硬玉）、トルコ石などを埋め込んだ飾歯もしくは歯冠の表面を削り取ったものである。E-1 型は 1 ヶ所に象嵌するための穴をあけたもので、E-5 型は象嵌せずに唇面の大部分を削り込んだ削歯で「シャベル状」になっている [3)]。F 型は歯冠の咬合面と両

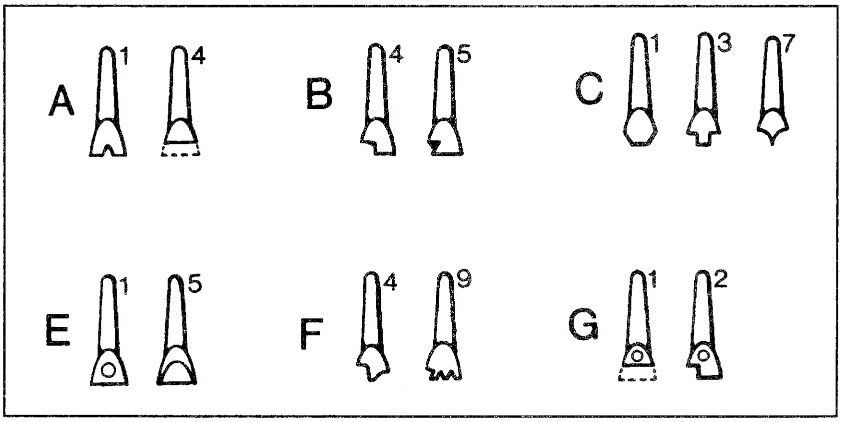

図2　ワシャクトゥンに見られる歯牙変工一覧
（Romero 1970:51, Fig.1 より一部転載）

時期	人骨	遺構性格	埋葬形態	性	年齢	歯牙変工	副葬品
先古典期中期	E7	広場	単純		成人	E-5?	
	E8	広場	単純	男	成人	E-5、E-1	巻貝、笛、貝製人形、土製耳栓2
	E9	広場	単純		老人	削歯	翡翠製ビーズ78、貝製ビーズ20
先古典期後期	E15	広場	単純	女	青年	E-5?	幼児と埋葬
	埋196	住居基壇	?		成人	F-4	皿1、貝
	埋200	広場	?	男	成人	A-1	
	埋201	住居基壇	?		成人	A-4	皿1、翡翠製ビーズ（口中）
	埋228	広場	?	女	青年	B-5	皿1、翡翠製ビーズ（口中）
	埋241	住居	?		老人	A-1	
古典期前期	E6	神殿	列石墓	男	青年	E-5?	メタテ片1（頭上）、土器1
古典期前期	E21	神殿祭壇	単純		老人	E-5?	皿2（骨上）、翡翠製ビーズ9・耳栓2・ペンダント1
古典期前期	A5	儀礼基壇	単純		成人	黄鉄鉱象嵌	
古典期前期	A27	広場石碑	単純	男	成人	E-1（黄鉄鉱）	皿2（頭上）
500-600	C1	神殿	精巧石室墓	男	成人	削歯	壷6、モザイク片（翡翠・貝・黒曜石）、翡翠製ビーズ5・ペンダント
500-600	C2	広場	単純	女	成人	詳細不明	彩文皿2、鉢2、翡翠製彫刻ペンダント1
500-600	A39	神殿	石室墓	男	成人	削歯	炭化物
古典期前期	埋191	神殿	?	女	成人	C-7　C-1　B-4	貝、石器、エイのとげ
600-700	A4	儀礼基壇	石室墓		成人	黄鉄鉱象嵌	壷2
600-700	A10	儀礼基壇	単純			象嵌（準備段階）	壷3
600-700	HM3	住居基壇	列石墓	男	成人	象嵌（準備段階）	皿2（内1に頭骨）、彩文鉢1
700-800	A38	宮殿祭壇	石室墓		成人	削歯および黄鉄鉱象嵌	彩文皿1、彩文鉢1、壷1（コパル含）、コパル、炭化物
700-800	A40	神殿	石室墓	男	老人	E-1（翡翠）　A-4　B-5	鉢1、彩文皿1、彩文鉢、彩文皿1（カカオ豆5、翡翠1含）、翡翠製ビーズ2・耳飾2、製品1、マット
700-800	A19	宮殿	石室墓	女	成人	C-3　B-5	炭化物
700-800	HM5	住居基壇	頭部列石墓		子供	E-5?	貝製ビーズ3
700-800	HM12	住居基壇	蓋なし列石墓		成人	削歯	彩文鉢1、壷1
700-800	HM13	住居基壇	単純		成人	E-5?	鉢1
800-900	A37	宮殿	石室墓	女	成人	B-5　A-4	パンプキンの茎
800-900	A43	宮殿	石室墓	男	成人	削歯	皿1、鉢2、彩文壷1、ミニチュア壷1（コパル含）、翡翠製ビーズ3、織物、コパル
800-900	A51	宮殿	単純	女	成人	F-9　C-3　B-5	鉢1（頭上）
800-900	A34	宮殿	石室墓	男	成人	G-2　E-1（翡翠）	鉢1、皿1、彩文壷1、翡翠製耳飾7
800-900	A67	宮殿	蓋なし列石墓	女	成人	削歯	
古典期後期	埋195	住居	?	男	老人	F-4	
古典期後期	埋202	宮殿	?	男?	成人	E-1（黄鉄鉱）	石器（詳細不明）
古典期後期	埋209	住居基壇	?		成人	G-1　G-2	（詳細不明、多種）
?	E5	神殿	単純	男	老人	E-5?	貝製品6、獣骨4
	E17	広場	単純	男	成人	削歯	貝1、ジャガー歯
	E19	広場	単純		青年	E-5	

表1　ワシャクトゥンにおける歯牙変工された人骨一覧

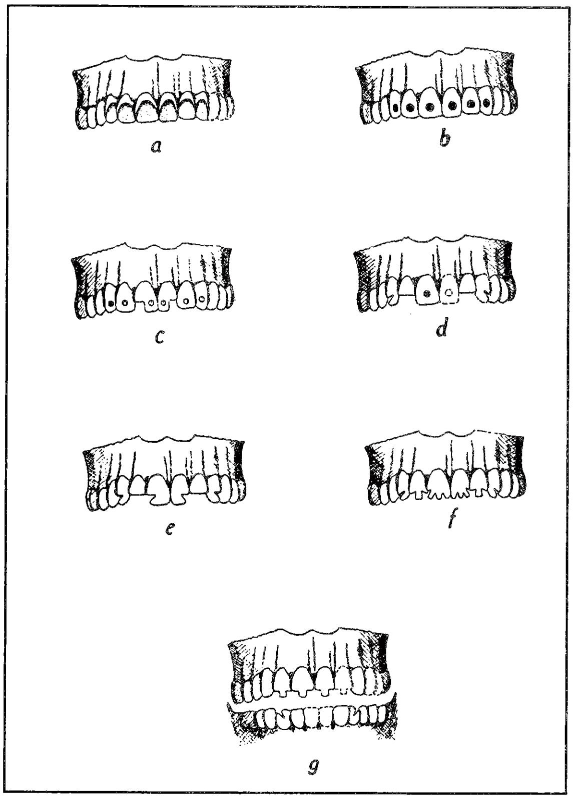

図3　ワシャクトゥンにおける主な歯牙変工例
（Smith 1950, Fig.116 a より転載）

角、あるいは歯冠の咬合面と唇面を変工した削歯である。F-4 型は片方を直角に深く削り取り、もう片方を浅く削り取っている。また F-9 型は一方の角を削り取り、歯冠の咬合面を 2 ヶ所 V 字形に切り込みを入れたものである。G 型は削歯と飾歯の両方の要素を合わせ持った複合的な歯牙変工であり、A-4 型に 1 ヶ所象嵌を施したものが G-1 型、B-4 型に 1 ヶ所象嵌を施したものが G-2 型である。

B-4 型や G-2 型は、2 本合わせると「T 字」を形成する。「T 字」は、マヤ暦の 1 つである 260 日暦の第 2 日を表す文字「イク（*ik*）」の形を連想させるという説がある［Linné 1940］。また、「イク」は同時に息や生命である風を象徴する記号であるとされている［Longhena 1998: 115］。さらに「イク」は「チャック（*Chac*）」を表す文字でもあり、雨の神「チャック」の要素としてマヤ地域の彫刻や絵文書に見られると考えられている［Romero 1958: 234］。

なお、ロメロ分類による D 型は、歯冠の唇面に直線状の切痕のみが認められ、咬合面は削らないという型式だが、ワシャクトゥンでは認められない。この遺跡における主な歯牙変工例は図 3 を参照されたい。

3. ワシャクトゥン遺跡の概要

ワシャクトゥンはティカルの約20ｋｍ北に位置するマヤ低地の遺跡で、先古典期中期から居住が始まり、古典期前期前半にはティカルとほぼ同規模の勢力を誇った。だが378年にティカルの支配下に置かれ、その後はティカルとほぼ盛衰を同じくした中規模程度の都市である。記録に残されている最後の日付は石碑12に刻まれた889年で、この後都市としての活動は急速に衰退し、一部未完成のまま建築が停止されたようである。

ワシャクトゥンはワシントンのカーネギー研究所によるプロジェクトによって調査され、第1期の1926～31年にはグループEを中心にオリヴァー・リケットソンらによって［Ricketson and Ricketson 1937］、第2期の1931～37年にはグループAを中心にレドヤード・スミスらによって行われた［Smith 1937, 1950; R. Smith 1937］。また住居マウンドについては、1932年にロバート・ウーチョップらが調査した［Wauchope 1934］。これまで少なくとも8つの建造物グループと複数のマウンド[4)]が確認されているが、ここでは小論の中心となるグループEとグループAについて、建造物の概要を整理する。

3-1. グループE（図4上）

グループEは、先古典期からグループAに先立って発展した建造物群であり、宗教センターとして重要だと考えられている［Ricketson and Ricketson 1937］。中央広場を中心に、北・東・南側の3つのマウンドと西側の建造物E-VII複合から構成されている。このグループの建築活動は、ほぼ古典期前期までに終了した。

東側マウンドには、北から横並びに神殿E-I、神殿E-II、神殿E-IIIが建てられた。神殿E-Iは高さ約5m、直径14mほどの角錐形を呈する。前方と奥に部屋があり、奥はさらに2つの小部屋が作られている。その2つの小部屋を仕切るように真中に祭壇が設けられている。神殿E-IIは高さ約5m、長さ約21mで、3つの神殿の中でもっとも大きい。前方には横長い部屋が、階段をのぼった後方にも部屋がある。奥の部屋の正面には祭壇があり、祭壇の両脇には小部屋がある。さらにそれぞれの小部屋の隣奥には回廊が広がっている。キャッシュの多さから、神殿E-IIがもっとも宗教的役割が強かったと判断できる。

南側マウンドには、神殿E-IV、神殿E-V、神殿E-VIがあるが、東側マウンドにある神殿群とは異なり、基壇を囲むように東側、南側、西側に建てられている。3つの神殿のうちやや大きめの神殿E-Vには部屋が前方と後方にあり、後者には漆喰が施された2つのベンチが祭壇の両脇にあり、正面にも1つベンチが見られる。なお、南側マウンドのほぼ中央には祭壇1があり、神殿E-Vの正面に位置している。

北側マウンドには、中央広場側にマウンドE-VIIIが、その北東と北西にそれぞれ神殿E-X・E-IXが、そして北側に小型のマウンドE-XIがある。2つのマウンドには建物がほとんど残っていない。北東にある神殿E-Xの壁は一部しか残っていないが、前方の部屋と後方の部屋があり、後方の部屋が3つの部屋に分かれていたと考えられている［Ricketson and Ricketson 1937: 101-02］。

中央広場の西側に位置する建造物E-VIIは、まず下層部分が古典期前期に建築された。高さ約8mの角錐のピラミッドで、四方の階段の両側には「怪奇な」仮面の漆喰彫刻が存在している。この

計 18 個の仮面彫刻は、何らかの宗教と関連する象徴と解釈され、この建造物が儀礼的意味を持つ神殿であったことは明らかである。次にこの下層部分を覆う形で、高さ 13.7m の二次的なピラミッド状の建造物 E-VII と小型のピラミッド状の建造物 E-XII が建設され、建造物 E-VII 複合となった。この建造物と先述した東側マウンドの神殿 E-I、神殿 E-II、神殿 E-III の位置とは、天文学的に大きな意味があることがわかっている［Ricketson and Ricketson 1937: 103-09］。すなわち、建造物 E-VII 複合の階段から東側マウンドの神殿群を見ると、春分と秋分の日には神殿 E-II の中央から、夏至の日には神殿 E-I の北側の端から、そして冬至の日には神殿 E-III の南側の端から、太陽が昇るように建築されたのである（図 4 上の点線参照）。

3 - 2. グループ A（図 4 下）

グループ E の北西約 700m の地点には、グループが存在する。グループ E に遅れて建築された建造物群だが、ワシャクトゥンの中では最大の建造物群で、中央・南・東広場の 3 つから構成されている。また、西側には建造物 A-XII・A-XIII・A-XVI が、中央広場の北西には建造物 A-XIV・A-XVII があり、周囲にも他の建造物が散在している。このグループ A とその北側に位置するグループ B とでワシャクトゥン遺跡の中心をなしている。グループ A でもっとも規模が大きく複雑なのは、建造物 A-V 複合である。中央広場に建てられたこの建造物複合は、住居用の建造物が建てられた後、神殿を主とした宗教複合を経て、支配者の住居と政治的な空間を兼ねた宮殿 [5]へと変化したと考えられている［Smith 1950: 13-44］。

まず先古典期後期（前 300－後 250 年）には南広場の北西に建造物 A-I が建てられ、自然の高い地形を部分的に利用してピラミッド状の建造物 A・B が作られた。建造物 A-V では、基壇と住居用建物が作られた。

古典期前期（250－600 年）において、建造物 A-I は中央広場の南側にある建造物群ではもっとも重要な宗教的建造物とされ［R. Smith 1937, Smith 1950: 14］、ピラミッド状の建造物 C・D が建てられた。建造物 A-V では、住居用基壇が増築され、さらに A・B・C の 3 つの小さな神殿が建築され、いわゆる建造物複合となった［Smith 1950: 19-22］。

古典期前期後半（500－600 年）になると、建造物複合 A-V にはさらに神殿 F・G・H が建てられ、複数の儀礼用の部屋が設けられたことから［Smith 1950: 23-25］、徐々に宗教色が濃くなっていったと思われる。一方、建造物複合 A-V の南東には建造物 A-XV があり、基壇は高さ約 9m で 3 層に分かれており、その上に神殿が建てられた。

古典期後期前半（600－700 年）になると、建造物 A-I では新たにピラミッド状の建造物 E が建てられた。このピラミッド E は儀礼に使われたと考えられており［R. Smith 1937］、西側と東側に部屋が 2 つある。一方、建造物複合 A-V では多くの部屋を持つ複数の建造物が増築され、宮殿として利用されたと考えられている［Smith 1950: 26］。また、東広場に建てられた建造物 A-XVIII は、長方形の基壇の上に計 18 の部屋を持つ 2 階建ての建造物である。1 階には 11 個の、2 階には 7 つの部屋があり、2 階南側にある横長の部屋 12 の中央には祭壇がある。この建造物は宮殿とされているが、部屋が狭く快適な長期にわたる住居とは考えにくく、祭壇があることから宗教的な目的もあったと考えられている［R. Smith 1937: 27］。

古典期後期中半（700－800 年）になると、建造物複合 A-V には建造物 J・K など、さらに多くの

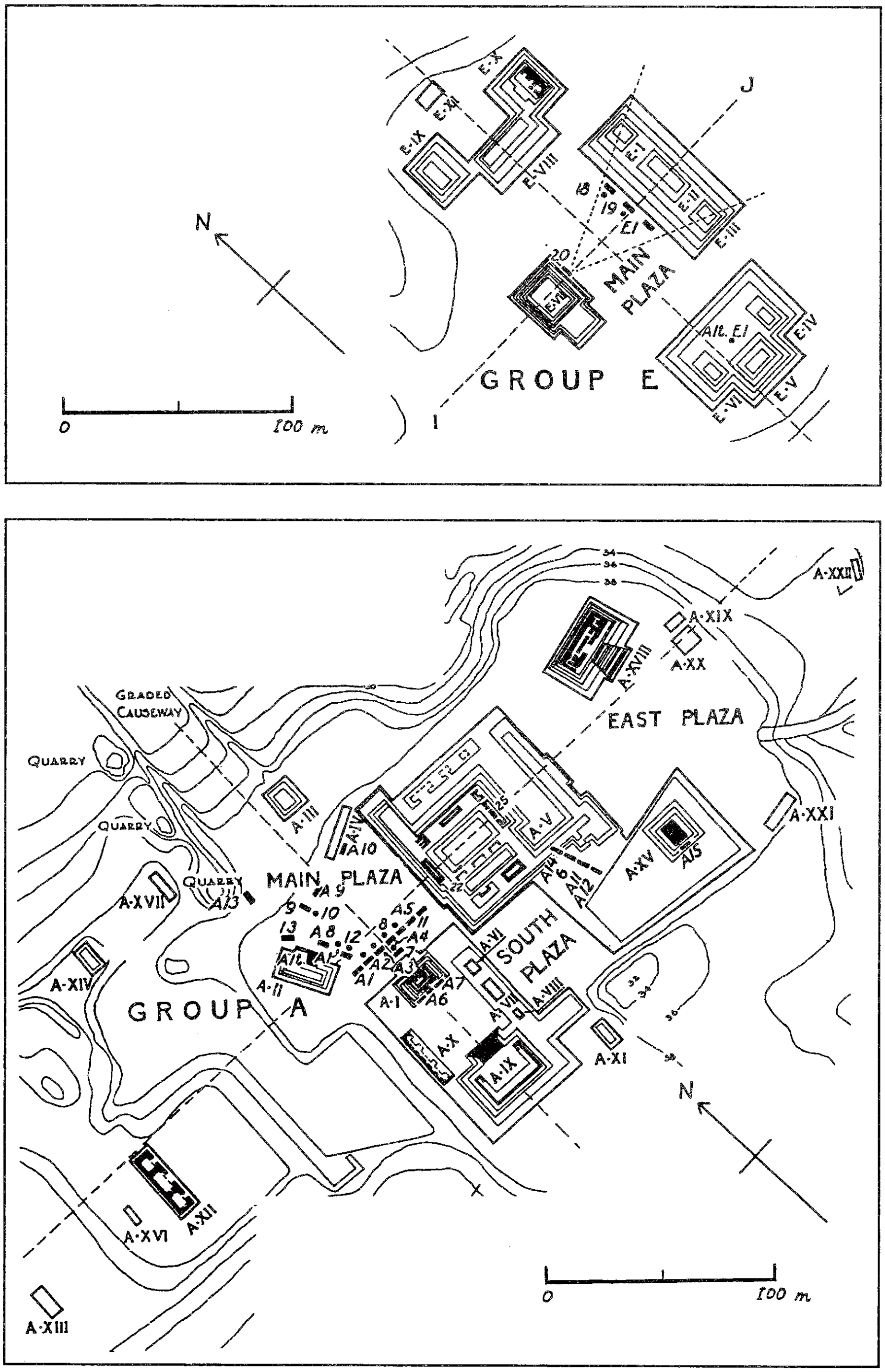

図４　グループＥ（上）とグループＡ（下）の遺跡平面図
（Ricketson and Ricketson 1937, Fig.143 を一部改変）

宮殿用建造物が建てられ、中庭のある大きな建造物複合となった。部屋にはベンチも作られ、祭壇も登場するようになった［Smith 1950: 26］。

古典期後期後半（800－900 年）になると、東西 14m、南北 25m、高さ 5mのピラミッドを持つ建造物 A-II が中央広場に建てられた。一方、建造物複合 A-V は拡張が続けられ、ベンチのある部屋がたくさん作られ、建造物 S・L・R・Q・W などが建設された。これらの建造物は複数の部屋を有した複雑なプランをしているため、やはり宮殿として考えられている［Smith 1950: 39-44］。

4. 考察

ワシャクトゥンにおいて歯牙変工がどのように推移したのか、そして埋葬形態や埋葬場所がどのように変遷していったのかを見ていく。そして両者の関係を分析しながら、歯牙変工された人物像について考察したい。なお、小論で扱う資料は人骨 112 体であり、そのうち歯牙変工が認められるのは 34 体である。ただし、埋葬形態が報告されていないオリバレス論文による歯牙変工例［Olivares 1997: 108-110］である埋葬人骨 196・200・201・228・241・191・195・202・209 の 9 体については、表 1 で歯牙変工の変遷を考える際には参考としているものの、表 2 の埋葬場所と埋葬形態との関係を分析する際には省いてある。つまり、埋葬形態別に歯牙変工された人物の割合を考察する場合、これら 9 体を数値には含めていない。

4-1. 歯牙変工の変遷

先古典期中期（前 600－前 300 年）

先古典期中期の歯牙変工は、メソアメリカ全体でも少ない。ベリーズのクエリョなど一部のマヤ遺跡で歯牙変工の報告例はあるが［Robin 1989］、マヤ地域全体としてこの風習が普及したとは思われない。人骨 E8 では、この遺跡独特の「シャベル状」に削った E-5 型（図 2、図 3a ）が報告されている［Smith 1950: Fig.116a］。すでに下顎にも歯牙変工が見られ［Ricketson and Ricketson 1937: 143］、上顎を中心とした歯牙変工の中ではこの時期としてはかなり珍しい例である。また、象嵌用の穴をあけた E-1 型も出土しており［Ricketson and Ricketson 1937: Plate 46］、ワシャクトゥンでは早くから歯牙変工が発達していたことがうかがえる。

先古典期後期（前 300－後 250 年）

飾歯は先古典期中期と変わりないが、削歯の種類が増えている。埋葬人骨 200 からは A-1 型が、埋葬人骨 201 からは A-4 型が、埋葬人骨 228 からは B-5 型が、そして埋葬人骨 196 からは F-4 型が発見されており、これらはすべて削歯に該当する［Olivares 1997: Table 8.2］。ただし形態としてはさほど複雑ではなく、歯牙変工がさかんに行われていたかどうかは、もう少し資料の増加を待つ必要があるだろう。

古典期前期（250－600 年）

歯牙変工は多様化し、型式は明確ではないものの黄鉄鉱を象嵌する飾歯も見られるようになる。2 本合わせて「T 字」を形成する B-4 型が埋葬人骨 191 に現れ、歯の両端を削る C-1 型や C-7 型も

新たに出現する［Olivares 1997: Table 8.2］。他の人骨で確認されている歯牙変工については具体的な型式が報告されていないが、この時期から歯牙変工のバリエーションが徐々に増えていく傾向がうかがえる。

古典期後期（600－900年）

翡翠や黄鉄鉱を象嵌する飾歯が増え、新たな型式の歯牙変工も多く報告されるようになる。古典期後期前半（600－700年）では、詳しい歯牙変工の型式が報告されていないが、すべて象嵌を施した飾歯である［Smith 1950: Table 6］。人骨 A10 や人骨 HM3 は準備段階で歯牙変工が完成しておらず［R. Smith 1937, Wauchope 1934］、特に後者は成人であることから、成人以前（成人を含めて）から歯牙変工を行ったことを示唆する重要な資料である。古典期後期中半（700－800年）になると、翡翠や黄鉄鉱が象嵌された飾歯と B-5 型を組み合わせたより複雑な歯牙変工が人骨 A40 に見られるほか（図 3d ）、人骨 A19 の C-3 型（図 3g ）は 1 本で「T 字」を形成する特殊なもので、この時期に初めて見られる歯牙変工である。さらに古典期後期後半（800－900年）になると、飾歯と削歯の両要素が 1 本の歯に見られる人骨 A34 の G-2 型が現れる（図 3c ）。これも翡翠を象嵌した「T 字」を形成するものであり、注目される例である。また複雑な削歯である F-9 型が出現し、B-5 型や C-3 型とセットになっている人骨 A51（図 3f ）も認められる。このように、古典期後期後半は歯牙変工の型式がかなり複雑化した様相が顕著である。

後古典期（900－1521年）

この時期の埋葬は 3 基あるが、いずれの人骨にも歯牙変工が認められなかった。よって、この遺跡では後古典期に歯牙変工の風習は行われなかったと考えられる。

4-2. 埋葬形態と埋葬場所の変遷

先古典期中期（前 600－前 300年）

この時期の埋葬場所は歯牙変工の有無にかかわらずすべて広場で、しかもすべてが穴を掘られて石で区画を設けずに蓋なども見られない単純な埋葬（土壙）であった（表 1）。しかし、歯牙変工された被葬者とそうでない被葬者との埋葬場所は、やや異なっている。5 つの埋葬のうち、3 体の人骨 E7・E8・E9 には歯牙変工が発見されたが［Ricketson and Ricketson 1937: 142-44］、これらは広場の北東角に集中している。この近くから発見された人骨 E13 は未発掘であり、歯牙変工の有無は不明である。もう 1 体の人骨 E3 は広場の西端に位置しており、他の 4 体の人骨が埋葬された場所とは離れている［Ricketson and Ricketson 1937: Fig.197］。したがって、歯牙変工された被葬者を意図的にこの区画に埋葬した可能性が高い。ただし、広場での発掘は部分的なトレンチ発掘であった。

先古典期後期（前 300－後 250年）

グループ E では、先古典期後期においても埋葬は建造物の基壇の中からは見つからず、6 基の埋葬はすべて広場の下から発見された。そのうち、土壙に単純に埋葬された人骨 E15 のみに歯牙変工が認められた［Ricketson and Ricketson 1937: 147］。他の 5 体の人骨については、埋葬形態が報告されていない［Olivares 1997: 108-110］。なお広場での発掘はやはり部分的なトレンチ発掘で、これら

がすべての埋葬ではない可能性もある。

一方グループAでは、先古典期後期から建築活動が始まり、南広場の北西に位置する建造物A-Iの儀礼用建造物の基壇中から、単純に掘り込んだ人骨A9が発見された［R. Smith 1937: 225-26］。建造物A-Vでは、住居の床下から人骨A61・A63・A56が、基壇の中から人骨A50・A70・A53・A73が発見された［Smith 1950: 99-101］。しかし、いずれの人骨にも歯牙変工は認められない。

オリバレス論文の5体の歯牙変工された人骨例［Olivares 1997］も、埋葬場所は広場や住居であった。まだ神殿や宮殿などの大規模な建造物が建てられておらず、この時期までは埋葬場所が広場や住居、基壇に限られている。ただこの時期については、歯牙変工が認められない埋葬例も含めて、もう少し発掘調査による資料の増加が必要だろう。

古典期前期（250－600年）

グループEでは活発に建造物が建設され、それに伴って神殿の祭壇下や部屋の床下に多く埋葬されるようになった。少なくともグループEにおいては、広場での埋葬例は報告されていない。南側マウンドの祭壇前にある神殿E-Vの前方部屋の床下で発見された列石墓からは、切歯が変工された人骨E6が見つかった［Ricketson and Ricketson 1937: 142］。この神殿E-Vは中央広場から上る階段の南側正面に位置しており、儀礼活動の中心であったと思われる。被葬者の頭上にはメタテ片が埋葬されており、神殿を作る前に奉納として床面に埋めた可能性がある。また東側マウンドに立つ3つの神殿のうち、北側に位置する神殿E-Iにおいて、南部屋にある祭壇の右側床下から人骨E21が発見された［Ricketson and Ricketson 1937: 150］。歯牙変工された老人が単純な土壙に二次埋葬されており、やはり神殿を作る前に奉納された可能性が高い。一方、神殿E-IIの祭壇下にある人骨E1と人骨E4、祭壇右側の床下にある人骨E23、神殿E-VIIIの祭壇右側の床下にある人骨E22、そして二次的なピラミッド状建造物E-VIIの土台の中にある人骨E2には歯牙変工が認められない。

次にグループAでは、宗教的建造物と考えられる建造物A-Iで、ピラミッドCの基壇からは石室墓に人骨A6が、ピラミッドDの基壇からは単純な土壙の中に人骨A5が発見された［R. Smith 1937: 225-26］。また、南側の中庭にある石碑A7付近からは同じく単純な埋葬の人骨A27も発見された［Smith 1950: 97］。人骨A5と人骨A27はいずれも二次埋葬であり、被葬者には黄鉄鉱を象嵌した歯牙変工が認められる。このことは、他の墓から意図的に歯牙変工された被葬者を移した行為と考えてよいであろう。この埋葬場所が儀礼基壇や石碑付近であることは、二人の儀礼色が濃かったことを示唆している。しかし、建造物A-Vの基壇の中から発見された単純な埋葬の人骨A35や、上部階段の下にある石室墓から見つかった二次埋葬の人骨A66をはじめ、その他の埋葬には歯牙変工が認められなかった。

古典期前期後半（500－600年）になると、この時期のみに見られる大型墓が作られるようになる。神殿基壇である建造物Fの下から発見された人骨A29は、副葬品が豊富な大型墓に納められている［Smith 1950: 97］。また神殿基壇である建造物Gの下からも、切石を用いた大型墓で人骨A31が発見され［ibid.］、部屋8の壁下からも大型墓で人骨A22が見つかった［Smith 1950: 96］。両者は副葬品の量・質ともに豊富である。しかし、いずれの大型墓からも被葬者には歯牙変工が認められなかった。このことから、神殿基壇には王または最高級と考えられる人物が納められたが、歯牙変工は施されなかったことがわかる。一方中央の中庭の下からは、石室墓に人骨A39が発見され、被葬者

先古典期中期				
埋葬場所	広場		計	
埋葬形態	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数
単純埋葬	3	5	3	5
計	3	5	3	5

先古典期後期								
埋葬場所	住居		広場		儀礼基壇		計	
埋葬形態	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数
単純埋葬	0	5	1	6	0	1	1	12
列石墓	0	2					0	2
計	0	7	1	6	0	1	1	14

古典期前期														
埋葬場所	住居		広場		儀礼基壇		埋葬建築		祭壇（神殿）		神殿		計	
埋葬形態	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数
単純埋葬	0	1	2	2	1	2			1	5			4	10
列石墓											1	2	1	2
石室墓					0	1	0	1			2	5	2	7
大型墓							0	1			0	3	0	4
計	0	1	2	2	1	3	0	2	1	5	3	10	7	23

古典期後期前半								
埋葬場所	住居		儀礼基壇		宮殿		計	
埋葬形態	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数
単純埋葬			1	1	0	1	1	2
チュルトゥン	0	1					0	1
列石墓	1	2			0	2	1	4
石室墓			1	4			1	4
計	1	3	2	5	0	3	3	11

古典期後期中半												
埋葬場所	住居		儀礼基壇		祭壇（宮殿）		神殿		宮殿		計	
埋葬形態	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数
単純埋葬	1	2							0	2	1	4
列石墓	2	7	0	2			0	1	0	4	2	14
石室墓	0	1			1	1	1	3	1	2	3	7
計	3	10	0	2	1	1	1	4	1	8	6	25

古典期後期後半										
埋葬場所	儀礼基壇		祭壇（宮殿）		神殿		宮殿		計	
埋葬形態	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数	歯牙変工	総数
単純埋葬							1	9	1	9
列石墓	0	1					1	6	1	7
石室墓			1	1	0	1	2	6	3	8
計	0	1	1	1	0	1	4	21	5	24

表2　埋葬場所と埋葬形態との関係

には歯牙変工が施されていた［Smith 1950: 98］。このことは、神殿の中庭で儀礼活動が行われており、その中心となった人物をこの場に埋葬したことを反映していると考えられる。

このように古典期前期になると、E・A グループとも儀礼に関わる神殿の建築が本格的になり、宗教的活動が盛んになったことがうかがえる。埋葬場所は神殿のものが4体もあり、注目される。概ね歯牙変工された人物が埋葬されることが多くなったことも、儀礼活動と無関係ではないだろう。ただし列石墓が増え、石室墓も作られるようになったものの、歯牙変工された人物は依然として土壙のような単純な埋葬のものも多い。

古典期後期（600－900 年）

グループ E での埋葬はまったく見られなくなり、活動の中心はグループ A に移行する。しかも神殿よりも圧倒的に宮殿の方が多くなる。古典期後期の土器は編年研究が進んでおり、時期が細分されて報告されているため［Smith 1950］、古典期後期を 3 期に分けて埋葬の様相を見ていきたい。

古典期後期前半（600－700 年）では、建造物 A-I に新たに儀礼用ピラミッド E が建てられ、西側の部屋の基壇下に作られた精巧な石室墓からは人骨 A2 が、東側の部屋の基壇下から見つかった石室墓からは人骨 A3 が発見された［R. Smith 1937: 208-09］。また人骨 A3 のある東側の部屋の南側からは石室墓に人骨 A4 が、人骨 A2 と A3 の間からは土壙に単純に埋葬された人骨 A10 が発見された［R. Smith 1937: 224-26］。そのうち歯牙変工が認められる人骨は、A4 と A10 の 2 体だけである。建造物複合 A-V の一つである建造物 V の基壇の中からは石室墓に納められた人骨 A23 が、宮殿として建てられた建造物 K の部屋 21 の床下からは、列石墓に入った人骨 A24 と単純に埋葬された人骨 A25 がそれぞれ見つかった［Smith 1950: 96-97］。しかし、これらの人骨は歯牙変工されていなかった。なお、グループ A 以外の住居用建造物の基壇からは列石墓 HM3 が発見され、歯牙変工された人骨が 1 体出土している［Wauchope 1934: 137-38］。

古典期後期中半（700－800 年）になると、建造物複合 A-V では宮殿が多く建てられるようになり、その中から 14 基の埋葬が出土した。建造物 J にある部屋 19 のベンチの中からは石室墓である二次埋葬の人骨 A32、同じく部屋 19 の祭壇から石室墓内に人骨 A38 が発見された。双方とも石室墓であるが、人骨 A38 は歯牙変工され、コパルをはじめとする副葬品が多かった［Smith 1950: 98］。また、建造物 B にある部屋 27 のベンチの下からは石室墓に人骨 A40 が、同じく部屋 27 の床下からは単純な埋葬の人骨 A69 が見つかり、人骨 A40 にのみ歯牙変工が見られた［Smith 1950: 97］。建造物 N では、部屋 42 のベンチ下の部分列石墓に人骨 A11 が、部屋 41 から列石墓に人骨 A30 が、そして南側の中庭からは石室墓に人骨 A19 が発見された。列石墓の 2 体には歯牙変工がなかったが、石室墓から出土した人骨 A19 は歯牙変工されていた［Smith 1950: 96］。建造物 A の部屋 2 から発見された人骨 A33、西側階段の下から見つかった二次埋葬の人骨 A36、通路 2 の下から発見された人骨 A54、東側の中庭の下にあった人骨 A58 と人骨 A60 は、いずれも列石墓に納められていたが歯牙変工はされていなかった［Smith 1950: 98-100］。グループ A 以外の住居用建造物の基壇からも歯牙変工された被葬者が認められ、土壙に埋葬された人骨 HM13 が 1 体［Wauchope 1934: 155-56］と、列石墓に埋葬された人骨 HM5 と HM12 が 2 体発見されてはいる［Wauchope 1934: 137-38; 154-55］。だが、単純な土壙に埋葬された人物が 1 体なのに対し、歯牙変工された人物が神殿や宮殿の石室墓に納められる割合が高くなったことが、この時期の特徴であろう（表 2）。

古典期後期後半（800－900 年）では、特に建造物複合 A-V から多く埋葬例が報告されており、最多の 22 体の人骨を数える。埋葬場所としては、宮殿の部屋にあるベンチの下もしくは中に多い。建造物 S について、部屋 68 のベンチ下にある蓋付列石墓の中から人骨 A52 が、同じく部屋 69 下の石室墓の中から人骨 A48 が、同じく部屋 71 のベンチ下にある石室墓から人骨 A45 と部分的な列石墓から人骨 A44 が、それぞれ出土した［Smith 1950: 99］。また、建造物 L にある部屋 51 と部屋 28 のベンチの中からは、土壙に単純に埋葬された人骨 A64 と石室墓に埋葬された人骨 A57 が［Smith 1950: 100］、建造物 R にある部屋 63 のベンチ下の石室墓からは人骨 A43 が［Smith 1950: 99］、建造物 C にある部屋 5 のベンチの中にある列石墓からは人骨 A17 が［Smith 1950: 95-96］、そして建造物

Lにある部屋50のベンチの中にある石室墓からは人骨A34がそれぞれ発見された[Smith 1950: 98]。ベンチの中から出土した歯牙変工が施された人骨はA43とA34の2体であるが、いずれも石室墓であった。また、宮殿の建造物Qにある部屋57の石室墓から見つかった人骨A37と、同じく宮殿の建造物Wにある部屋88の列石墓から見つかった人骨A67にも、それぞれ歯牙変工が認められた[Smith 1950: 98-101]。さらに東側のテラスからも、単純な土壙の中に歯牙変工された人骨A51が発見されている[Smith 1950: 99]。この時期には宮殿における埋葬が急増し、歯牙変工も宮殿における埋葬に限られている(表2)。なお先述したベンチについては、歯牙変工の有無に関わらず埋葬が認められ、ベンチと歯牙変工の関連を特定することは難しい。

後古典期(900－1521年)

建造物複合A-Vの建造物Lにある部屋70の床下からは部分列石墓の中に人骨A16が、東側の中庭からは土壙に単純に埋葬された人骨A13が、そして建造物複合A-Vの堆積物からはやはり単純な土壙の中に人骨A7が見つかった[Smith 1950: 95]。これらの3基のみがこの時期に該当する。人骨A16には翡翠の副葬品が認められるが、他の2つはいずれも粗末な構造の単純な埋葬で、副葬品も発見されなかった。

4-3. 歯牙変工された人物像

以上の資料をもとに、副葬品も分析しながら歯牙変工された人物像について考察したい。表2に示したのが、それぞれの時期における埋葬場所と埋葬形態との関係である。歯牙変工の有無は、埋葬場所および形態と何らかの関わりがあるのだろうか。

先古典期中期には5体中3体の人骨に歯牙変工が見られ、この風習が行われた確率は60%というかなり高い数値である。ただし、広場は部分的なトレンチ発掘であるため、全面発掘であればこの割合が変わる可能性はある。人骨E9には翡翠製ビーズなど、他の2体の人骨への副葬品に比べて豊富であるが、これは成人に比べて老人を手厚く葬った可能性が考えられる。先古典期後期では、歯牙変工が認められる被葬者数は14例中1例のみとなり、約7%とかなり割合が減る。ただ、住居用建造物の基壇から5体の歯牙変工例が見つかっており、今後注目すべき時期である。先古典期全体で見ると、資料が豊富でないために歯牙変工された人物と埋葬場所および形態との関連を見出すことは、現段階では難しい。

古典期前期には、埋葬資料が23例と増加する。歯牙変工が伴う被葬者の数も7例となり、歯牙変工の割合も約30%になる。古典期前期には副葬品もかなり増加するが、歯牙変工の認められる被葬者への副葬品の量は、歯牙変工されていない被葬者のそれに比べて、逆に少ない傾向がある。単純な埋葬の場合、歯牙変工の有無によって副葬品の量や質にあまり差はないが、石室墓や大型墓に関して歯牙変工の有無による副葬品の量や質を見ると、明らかに歯牙変工されていない被葬者に対する副葬品の方が豪華である。例えば、神殿の精巧な石室墓から発見された人骨A20には、土器8点、翡翠製ビーズ29点、翡翠片75点などが副葬されていた。また、大型墓には当然副葬品が多数伴っていたが、歯牙変工された人骨はまったく認められなかった。したがって、副葬品が豊富で墓が精巧な作りの被葬者には、歯牙変工が行われなかったことになる。一方、埋葬場所を見ると、儀礼用建造物の基壇、神殿の祭壇、そして神殿の床下から歯牙変工された人骨が見つかっている。こ

のことから、歯牙変工は儀礼活動を行っていた人物に施された風習であったことが推測できる。

古典期後期全体では、埋葬が圧倒的に増加し、その数は 60 例にのぼる。そのうち歯牙変工のある被葬者は 14 例であり、約 23%を占める。割合としては古典期前期に比べてやや下がるが、翡翠や黄鉄鉱を象嵌する飾歯が増え、新たな型式の歯牙変工も多く報告されていることから、この風習が活発に行われた可能性が高い。以下、細分された時期ごとに見ていこう。

古典期後期前半には埋葬 11 例中 3 例に歯牙変工が認められ、割合は約 27%を占める。建造物 A-I の儀礼用ピラミッド E の基壇において、歯牙変工の有無に見られる大きな相違点は副葬品の違いである。人骨 A3 と人骨 A4 はほぼ同じ構造の石室墓から見つかったが、前者には翡翠や貝製品が副葬されている一方、後者には壺が 2 点副葬されているだけである。また、同様に歯牙変工が認められる人骨 A10 の副葬品も壺が 3 点のみで単純な土壙への埋葬である（表 1)。このことも、歯牙変工された人物の社会的地位が、歯牙変工されなかった人物の地位ほど高くはなかったことを示唆していると考えられる。政治の中心として活動した貴族が埋葬されたと考えられる宮殿には、歯牙変工された人物が埋葬されていない点も、そのことを示していよう。

古典期後期中半では、埋葬 25 例中 6 例に歯牙変工が認められ、その割合は 24%である。人骨 A40 は注目すべき資料で、特にこの被葬者の歯牙変工は先述したように複雑なものである（図 3d ）。この被葬者は神殿の石室墓に埋葬され、副葬品も土器 1 点、彩文土器 3 点（カカオ豆 5 粒と翡翠 1 点が含まれる)、翡翠製ビーズ 2 点、翡翠製品 3 点などがあった（表 1)。彩文土器に入れられていたカカオ豆は、王や貴族が重宝していたものとして知られている。これまでの傾向とは若干異なり、この古典期後期中半における歯牙変工された被葬者は、墓が精巧な作りで副葬品も豊富な場合もあったことになり、相対的な地位が向上したと思われる。

古典期後期後半では、埋葬 24 例中 5 例に歯牙変工が認められ、割合は約 20%と減少する。人骨 A43 には翡翠やコパルなど副葬品が豊富に見られ、翡翠製品が副葬されている人骨 A34 とともに儀礼的な性格が強いと考えられる。さらにいずれも宮殿下の石室墓に納められていたことから、政治にも関わっていた人物だったと推測できる。つまり、古典期後期後半において歯牙変工された人物は、政治的にも儀礼的にも重要な人物だったことがうかがえる。宮殿や神殿では政治の中心人物が儀礼をも司り、そうした人物に歯牙変工を施した可能性もある。

ところで、再度歯牙変工された人物の割合を見ると、古典期前期以降、歯牙変工された人物の割合は 20～30%であり、あまり変動はない。このことは、ワシャクトゥンという都市において歯牙変工された人物の社会的役割に一定の評価があったことを示唆していると思われる。そして歯牙変工された人物の埋葬場所が、儀礼基壇の中や神殿の床下、そして祭壇の近くであることが多く、副葬品にもコパルや翡翠製品などが含まれていることから、儀礼と関連が深い人物像が浮かび上がってくる。翡翠はオルメカ（Olmeca）の時代からメソアメリカにおいて貴重な石とされており、その色合いから水や植物、そして命を連想させるもので、マヤの世界観において中心を表す色が緑であることは翡翠と関係があるのだろう。つまり、その社会的な役割とは儀礼を司る「神官」であり、古典期のどの時期にも恒常的に重要な役割を果たしていたと思われる。歯牙変工は王に対しての風習ではなく、これまでの定説である「貴族」の中でも儀礼活動に携わる役割を果たしていた「神官」という職業集団を対象とした風習だった可能性を指摘できるのである。

ただし、歯牙変工された人物の割合が一定の範囲内だったとはいえ、古典期を細かく見ると、そ

の割合は時代を追うごとに少なくなっている。古典期前期には30%以上あったものが、古典期後期前半には約27%、古典期後期中半には24%、そして古典期後期後半には約20%と徐々に減少しているのである。この状況は、儀礼の重要性が減少したというよりも、「神官」が儀礼だけではなく政治活動にも参画したと、筆者は推測している。古典期後期後半になると、歯牙変工の型式もより複雑になり、「T字」形に代表されるような儀礼色の強い歯牙変工が見られることはすでに述べた。この風習が認められる人物が、古典期後期後半に宮殿に埋葬されることが多くなったことは、宮殿がさらに政治的かつ儀礼的空間として機能していたことを示唆している。ワシャクトゥンは、古典期後期に入ると徐々に都市として衰退してやがて放棄されるが、都市の衰退に伴い、「神官」は儀礼活動だけでなく都市間の抗争や都市生活の維持にも力を貸すことになったのではないだろうか。なお、この時期に住居に埋葬が見られなくなるのは、住居区域で生活していた人々が徐々に宮殿へ移っていったのか、それとも単に住居址が発掘されていないだけなのか、その結論は今後の住居址資料の増加に委ねたい。

5. おわりに

ワシャクトゥンではかなり早い時期から歯牙変工が発達し、時期が新しくなるほど型式が複雑になった。特に古典期後期には、削歯と飾歯が一緒になった歯が認められるようになり、翡翠を象嵌し歯を「T字」形にすることで、見る人々に対してある種の権威づけをしたと考えられる。歯牙変工された被葬者の性別に関しては、ワシャクトゥンにおいて男性14体に対し女性8体となり(表1)、やや男性が多いという程度で明らかな男女による差は認められない。メソアメリカ全体でも男性と女性の比率はほぼ2:1となるが[多々良 2004]、遺跡によって男女比は異なるため、明確に性別の違いによって歯牙変工したとは考えにくい。また歯牙変工された被葬者の年齢に関しては、ワシャクトゥンでは1例を除いて青年以降に歯が変工されている。おそらくほぼ成人になる際の通過儀礼として行われ、その権威づけの対象になったのは儀礼活動の中心となった「神官」という貴族集団であったのだろう。ただ、「神官」は先古典期から古典期後期前半まで、おそらくはかなりの労力を儀礼活動に注いでいたが、古典期後期中半以降は政治においてもある程度の役割を果たすことになったと考えられる。つまり「神官」は時代とともに役割を徐々に変え、古典期後期中半以降は政治的にも重要な存在となっていったと推測できる。歯牙変工の型式が複雑になっていったのも、そういった背景によるものと見ることができよう。

小論では、先古典期に歯牙変工された人物は必ずしも社会的高位と一致しない場合もあることを指摘した。だが古典期以降、ワシャクトゥンにおいては、歯牙変工は王などの最高位の人物に対する風習ではなかったが、「神官」を対象とした風習であった可能性が高い。サン・ホセなど他の遺跡でも、歯牙変工された人物への副葬品が豊富で、埋葬場所や形態も社会的高位を示す資料が存在する[Thompson 1939]。ただし、ワシャクトゥンでは住居址の発掘調査が進んでおらず、資料的に王や貴族のものに偏っていることは否めない。したがって、今後もマヤ地域の他の遺跡で住居址も含めて歯牙変工にどのような傾向が見られるのか、資料を実見・整理しながら追究していきたい。

謝辞
小論の執筆にあたり、坂井正人氏（山形大学）と吉田栄人氏（東北大学大学院）をはじめ、多くの方々より有益なご助言をいただきました。また、本誌査読者や編集委員の方々からも建設的かつ有意義なご指導を賜りました。末筆ながらここに記して感謝申し上げます。

註

1) 小論は、2003年11月29日に早稲田大学で行われた古代アメリカ学会第8回研究発表会の発表内容を、一部修正・加筆したものである。
2) 歯の用語について、歯冠とは口腔中に表れている部分のことで、エナメル質の内部にあたる。また、歯の唇面とは人から見える表側を、咬合面とは裏側を指す用語である。
3) リケットソンの報告書［Ricketson and Ricketson 1937］で「シャベル状」と記載されているものは、ワシャクトゥンの発掘報告書の図［Smith 1950: Fig.116 a］や写真［Ricketson and Ricketson 1937: Plate 46 b, d］から判断して一律にE-5型として扱った。
4) 「マウンド」とは、発掘前の盛り上がった丘のような状態のものを指す。これが明らかに建物の基礎になったものだと確認された場合、「基壇（プラットフォーム）」という用語を用いるのが一般的である。ただし、グループEの「マウンド」には複数の基壇が作られており、ここでは報告者［Ricketson and Ricketson 1937］の使用している「マウンド」という語をそのまま用いた。
5) スミスによると、神殿はピラミッド状の基壇を持ち、部屋などの内部プランが簡素なものである。一方、宮殿は神殿に比べて基壇の高さが低く、部屋などの内部プランが複雑なもので、複数階の場合もある［Smith 1950: 71-74］。

参考文献

Fastlicht, S.

1960 Las mutilaciones dentarias entre los mayas: un unevo dato sobre las incrustaciones dentarias. *Anales del Instituto Nacional de Antropología e Historia*, No.12, pp.111-30. México.

1962 Dental Inlays and Fillings among the Ancient Mayas. *Journal of the History of Medicine and Allied Sciences* 17:393-401.

Linné, S.

1940 Dental Decoration in Aboliginal America. *Ethnos* Nos.1-2, Ethnographical Museum of Sweden, Stockholm.

Longhena, Maria

1998［2002］ *An Illustrated Encyclopaedia of the Maya Glyphs*. Arnoldo Mondadori Editore S.p.A.（『図説マヤ文字事典』植田覺監修、月森左知訳：創元社）

Miller, M.E. and K.Taube

1993［2000］ *Gods and Symbols of Ancient Mexico and the Maya*. Thames and Hudson, London. （『図説マヤ・アステカ神話宗教事典』増田義郎監修、武井摩利訳：東洋書林）

Olivares, Nora M. López

1997 Cultural Odontology: Dental Alterations from Petén, Guatemala. *Bones of the Maya*, edited by Stephen L. Whittington and David M. Reed. pp.105-115. Smithsonian Institution Press, Washington D.C.

Ricketson, Edith B. and Oliver G. Ricketson

1937 Uaxactun, Guatemala, Group E. *Carnegie Institution of Washington* Pub.477.

Robin, Cynthia

1989 Preclassic Maya Burials at Cuello. *BAR International Series* 480.

Romero Molina, Javier

1958 Mutilaciones dentarias prehispánicas en México y América en general. *Serie Investigaciones* no.3. Instituto Nacional de Antropologia e Historia, México.

1970 Dental Mutilation, Trephination, and Cranial Deformation. Physical Anthropology, edited by T.D.Stewart, pp.50-67. *Handbook of Middle American Indians*, vol.9, R.Wauchope, General editor. University of Texas Press, Austin.

Smith, A. Ledyard

1937 Structure A-XVIII, Uaxactun. *Carnegie Institution of Washington* Pub.483. Contributions to American Archaeology, no.20, Washington, D.C.

1950 Uaxactun, Guatemala, Excavations of 1931-1937. *Carnegie Institution of Washington* Pub.588, Washington, D.C.

Smith, Robert E.

1937 A Study of Structure A-I complex at Uaxactun, Peten, Guatemala. *Carnegie Institution of Washington* Pub.456. Contributions to American Archaeology, no.19, Washington, D.C.

Thompson, J. E. S.

1939 Excavations at San Jose, British Honduras. *Carnegie Institution of Washington* Pub. 506. Washington, D.C.

Wauchope, R.

1934 House mounds at Uaxactun, Guatemala. *Carnegie Institution of Washington* Pub.436, Contributions to American Archaeology, no.7, Washington, D.C.

Welsh, W. B. M.

1988 An Analysis of Classic Lowland Maya Burials. *BAR International Series* 409.

多々良 穣

2004 「古代メソアメリカにおける歯の装飾」『古代文化』第56号第6巻、50-59頁、古代學協會。

原稿受領日　2003年11月29日
採択決定日　2004年04月27日